

新装版

建築と伝統

川添登

彰国社

口絵写真

I 美の意識と構造

生きているカタチ

5

風——予感の美学

27

竹——東洋の象徴

37

暮らしの中の美

50

II カタチ論

カタチ論

53
54

III 建築と庭園

伊勢神宮の造形——伝統論の出發と終結

75
76

薬師寺の東塔

104

西芳寺の庭園

153

桂と日光

172

IV 国民文化論

国民的秩序の形成

189
190

国民文化の形成

219

国民文化論の盲点

242

国際交流と国民的伝統

250

あとがき

論文初出覚書

に遅れてはならじと、馳せ参じた人びとが多いようだ。こうして、たとえ国民の所得が倍になったとしても、社会生活の秩序が混乱しかねない状態であることを、いまから警戒しておく必要がある。

そこでいやすくも国民文化に関心をもつ人びとは、あらゆる地域開発が、国民文化の向上に機能するようレールを引くことに、全力をあげてたたかうべきであろう。なんべんでも繰り返しですが、都市計画とは、経済効果を上げるためでも、都市機能の技術的な処理の問題でもない。それは第二、第三の問題であり、第一の主要な課題は、〈国民文化のあり方〉の問題なのである。しかし、それは欧米文化のパターンをあてはめることによって生まれるものではなく、これまで述べてきたような、日本の混乱に満ちた現実、そのものの中から生み出されなければならないものである。むしろ、混沌そのもののエネルギーを一物も残さず花開かせるものでなければならぬ。そして、そのためには、まったく新しい文化を生み出しうる、国民的な創造の論理が必要となる。

日本の論理と現代の論理

例にやや唐突の観があるが、しばらく閑話休題としてお読み願いたい。伝説によれば、京の五条橋の対決において、七つ道具をもった武蔵坊弁慶は、牛若丸の投げた小さな一本の扇子の前に敗北したことになっている。

この話をつくり、また、この話を伝えたたくさんの日本人の考え方からすれば、弁慶がもっていた槍も、長刀も、マサカリも、その本質において扇子と同じであり、扇子の使い方に習熟し、その奥義に達すれば、あらゆる武器を制することができるのであろう。それは、なぐることも、突くことも、また飛び道具にすることもできた。しかも、扇子は武器ではなく、元来は、あおぐ道具であり、舞踊や劇の小道具ともなり、指揮棒ともなった。すなわち、日本人は扇子にありとあらゆる道具の本質が存在していることを見いだしたのである。

ヨーロッパの近代主義者や日本文化論者が賞讃した〈日本的なもの〉は、この扇子に代表される。なぜなら機械時代の生んだ哲学の本質的な傾向は、最小のもので最大の効果をあげるものにあったからであり、一方、日本文化の真髄は、単純なものにすべてが包含されるものにあると考えられていたからである。

しかし、ここで注意しなければならないことは、この話は精神訓話に属するものであって、現実の実戦に使われたのは、弁慶が背負っていた七つ道具であったということである。吉川英治の『宮本武蔵』を読むなら、刀あり、槍あり、杖あり、棒あり、長刀、くさり鎌あり、武器の多彩なこと驚くばかりである。フランスの剣豪小説『三銃士』には、こう多くは出てこない。刀にしても佐々木小次郎の物干竿から、お杉婆さんの短刀に至るまで種々様々ある。これらの多くは、それぞれの派の創始者が発明したものらしく、これを見れば日本人の発明の才たるや驚くばかり

である。

日本の住宅やデザインの本質が扇子に見たような多用途にあるということは、その一面を伝えるにすぎない。牛若丸と弁慶と合わせて初めて一体のものとなる。牛若伝説よりも、もっとポピュラーな桃太郎は、偵察にキジを、塀をのぼらせて門をあけるのに猿を、攻めこむには犬を主力とする、というように、機能的に使い分けている。日本住宅も機能的分離を驚くほど見事にやっていた。戦前のいわゆる文化住宅の特色をなしていた応接間なども、日本人の機能的分化の才が生んだ発明品であろう。

なぜこのような例を出したかといえば、扇子と七つ道具との関係は、日本語でいう〈かた〉とか〈かたち〉との関係であり、これに〈すがた〉という言葉を加えて、日本の国民文化形成の全体像を描き出そうという大それた考えをもっているからなのである。

先に触れたように、私は近代建築の思想にたいへん疑問を感じた。そして近代建築の思想の根幹をなしているのは、機能主義である。つまり私は機能主義を否定しようとしていたのだが、そのときの私の羅針盤となったのが、武谷三男の著名な〈三段階理論〉である。

周知のように武谷理論は、カッシーラの『実体概念と機能概念』の批判の上に、人間の認識の過程は、現象論的段階、実体論的段階、本質論的段階へすすむとしたものであるが、私は、この実体と現象が〈かた〉と〈かたち〉であると考えた。ところで、かたちとは、かた・ちである。

とすれば〈ち〉とはなんであろうか。

ちとは、松村武雄によれば、古代の日本人にとつて、カミヤタマと並ぶ霊格の一つであったが、オロチ（山霊）、タチ（田霊）、ミチ（水霊）、イカツチ（雷）などのように、カミ以前の存在^{ウエゼン}とされる霊格をよんでいたようである。そしてチには霊のほか、血、乳、風、風、鉤などの文字があてられる。風はハヤチ（早風、疾風）、コチ（東風）などのチであるが、血、乳などと考え合わせれば、生命の根源つまりエネルギーのようなものと考えてもよさそうである。鉤は、釣針であり、日本人は海洋民族であったから、魚を釣り上げる小さな釣針に生命的なものを感じたとしても矛盾はない。

武谷氏は、あらゆるものはある観点から見ると実体であり、ある観点から見ると機能であるといわれた。機能とは〈働き〉であるから、さきのちを、機能であるということもできる。

さて、牛若丸の扇子は、いわばカタに、それぞれの用途にふさわしいちを与えることによって、無限にカタチを生み出すことができる。日本の武器に驚くほど豊富なカタチが存在したのは、日本人が、このカタとカタチとの関係をきわめて古くから知っていたからである。

日本の芸術、武道、芸事、作法などほど、カタをやかましく教えるものはない。しかし同時に、カタにとらわれてはならないと注意される。カタは、それぞれの場面にふさわしいカタチをとることによって、初めて生命を与えられる。したがって日本のあらゆる伝承は、カタを通して伝達

によって成り立っていた。人びとはカタを受け継ぎ、それぞれの個性をカタチに表現した。しかし、もつともすぐれたカタチというものもあるはずである。そのようなカタチは奥義に達したものののみ、秘伝として与えられた。そのような秘伝の書というものをひもといてみると、ただ円が書いてあるだけ、といった案外にたわいのないものが多いと言われる。それはチが客観的に伝承できず、インスピレーションによってのみ獲得できるものであるからであろう。しかし、このようなチは、カタに対する徹底的な習練を通じてしか体得できないとされた。カタにまったく熟達し、文字通りそれが血肉化されたときにのみ体得される。禅でいう「無」はこのような奥義に達したチをさすものであろう。道元は、世俗的な価値の一切を否定しながら、恣意的な主観に流させないため、厳格な戒律をしいたといわれる。この戒律こそ、カタであり、縁であり、作法、マナーであろう。すなわち、本質はカタ（実体）を通してしか肉薄できないのである。

さて、カタは伝達できるが、チは伝達できない。したがって歴史の流れの中で、カタチの中に存在していたチは捨てられて異なったチがついて、新しいカタチとなる。たとえば、徳川時代の江戸城は、カタとして伝承され、新しいカタチで現代に機能している。しかし、このようにカタは存在し続けるがゆえに、往々にして新しい進歩に対しての障害となる。

さて、このあたりで本題の国民文化の問題にひきもどすことにしよう。現代日本の文化は、マス社会的である。それは悪くいつて海賊、よくいつて開拓者であるイギリスが、リースマンのいう近代人の性格の特性としての内向志向型であることによって、近代の中に頑固に伝統を維持しているのに対して、外来文化の移入によって文化を築いてきた日本人は、本来的にマス社会的な外的志向型であり、そのことからマスのなものが伝統的なものの中に融解している。

あらためてことわるまでもなからうが、カタは、カタチをもつて初めて現象する。したがって、カタは実体ではあるが、現実的には実体はない。上に述べた日本文化の傾向から、イギリスをはじめとするヨーロッパが、伝統をカタチとして存続させているのに対して、日本は伝統ある国と言われながらも伝統的なカタチは意外に少なく、カタのみとして継承されている場合が一般である。そしてカタは、新しいチをつけ加えることによって、容易に新しい時代に即応しうるように変貌する。そしてそれがかえって日本の伝統的要素をきわめて長期にわたって存続させる結果となる。しかし一方、日本の文化は急速な勢いで進歩する。つまり古いカタに新しいチをつぎつぎに付け替えることによって、根底から変革することなく、いわば流行的現象のように変貌させる。

いわゆるマスには、マス・コミュニケーション、マス・プロダクション、マス・ソサエティなどと呼ばれる三つの形態がみられる。次に、この関係をカタとチの関係に結びつけて考えてみたい。

人間の自己疎外といわれるものは、(一)人間は自然の一部でありながら、しかも自然と対立する。

(二)人間は、たった一人で生まれ、たった一人で死んでゆくにもかかわらず、たった一人では生きてゆくことができない、という二点にかかっている。そしてこの自己疎外を克服しようとするところに、あらゆる文化的な行為が生まれる。人間は、第一の矛盾を克服するため、すなわち、人間と自然を分かち、またつなげようとする行為によって道具を發明し、第二の矛盾、すなわち、個と社会をつなげるために、ことばをはじめとする種々のコミュニケーション手段を生み出した。

ところで、人間の自己疎外の関係から、ここに三角関係が生まれる。すなわち、(A)モノ(自然)およびつくられた自然)と個、(B)個と社会、(C)社会とモノ(自然)とである。そして(A)に介入するのが、道具の発展としての機械、そして現在のマス・プロダクションの世界、(B)に、マス・コミュニケーションの世界、(C)に、マス・ソサエティと言いたい、そのうち、情報関係は(B)に含まれるから、残された物理的なもの、すなわち環境、前に述べた総合開発などの世界がある。これをさらにつきつめてその本質を抽象してゆくと、(A)はエネルギー、(B)に観念、(C)実体となるはずである。

ところで、モノと個との間に、産業、モノと社会の間に、環境をおいたことに、次のような疑問をもたれる方も、おられることと思う。産業も社会的なものであり、環境においても、個とモノとのつながりがあるだろう、と。しかし、そうではないのであって、機械は、つねに人間をバ

ラバラの個に細分してゆこうとする傾向をもち、一方、環境のほうが、すでに自動車の例でみたように、いかに個人の所有であっても、それをより良く機能させるためには巨額な公共投資を必要とする。同じく個人住宅も、上下水その他の都市設備によって、社会的存在である。このように、社会が進歩すればするほど、(A)の世界は、共同体を個人に、個人をさらに目、耳、手等々のバラバラの感覚に分解してゆき、(C)の世界は、ますます個人を社会に強く結びつけてゆく。

(B)の観念の世界が、種々のコミュニケーション手段、言葉、文字、シンボル、記号などによってつくり上げられるものであることは言うまでもあるまい。そして、実は、(A)はエネルギーの世界であるからち、(C)は実体でカタ、残る(B)が観念の世界、すなわちイメージ、すなわちスガタにあたるのである。

スガタのすは、素直、素肌などのすであり、カタそのものである。すでに述べたように、カタはカタチとならなければ、現実に現象しないが、それでもカタは存在する。したがって、そのカタそのものを観念の中で生み出すのが、スガタ(イメージ)なのである。

チの世界がますます発展すれば、すなわち、マス・プロがより強大なものになればなるほど、人びとはますます個に分解される。しかし、あるカタに、つぎつぎにチを付け替え、大量に放出することによって流行現象を生み出し、コミュニケーションの世界に流れこむ。すなわち、人びとは個に分解されながらも、このことによって互いに結びつけられ、同時に夢と欲望をかりたて

られる。

環境の世界は、カタを与えるべきであつてカタチをつくるべきではない。たとえば、これからの都市や住宅は、あらゆる進歩を制約するものであつてはならず、むしろそれを促進させるようなものでなければならぬからである。それはあらゆる機能（チ）が、それに容易に付加しうるものであり、その具体的な例をあげるいとまはないが、要するにチの方向がエフィシエンシーを高めるためにあり、そのポテンシャルが高まれば、高まるほど、人びとの緊張も高まり、流動性を求めるからである。デンマーク、スウェーデンなどが、住宅、道路などの公共投資に、国民総生産の三分の一ないし四分の一を投入して、地上の天国をつくつたが、同時に社会的なテンションが起こつて、自殺、離婚、精神病、性犯罪がきわめて多いことは、しばしば指摘されるところである。

そこでカタの形成が新しい創造の基礎であるが、その源泉は、むしろチの側から放出される。それがかもし出す混沌が新しい秩序の感覚を育ててゆくからである。チの流れは、人間の欲望を無限に高める。カタがない限り、そのチは物質的な現実になりえないが、飛行機は実際に発明される前に、すでに人びとの欲望によつて夢の中で飛んでいた。それがスガタである。種々の前衛的な芸術の試みは、その現われの一つであり、ありうべきものとしてのスガタが描かれる。カタのみでは生命をもちえない。それに生命が加わつたものとしてのスガタを描けないものは、新し

い時代のカタを創造することができない。その生きたスガタをなくして造られたカタは、それが社会に現象したとき、すでに死んだカタチとして生まれ文化の進歩を止める。

このような意味から、私たちは現在の混乱を、むしろ喜ぶべきであろう。それは最初に述べたような、国民大衆に対する無条件の絶対的な信頼感によつてささえられる。しかし、これまでの経済法則からすれば、生産の増大に消費が追いつかなかつたときに戦争が起ころとされた。しかし、戦争に代わる完全消費がある。それはすでに述べたように建設なのだ。すなわち、私たちが待ち望む、未来の建設時代は、人類が戦争を完全に否定したときに訪れるだろう。そこへ至る国民文化の形成は、スガタ、カタ、チの精密に計算されたダイナミックなバランスの上に、つくり上げてゆかねばならないのである。そして日本の現状は、決して悲観的なものではない。

（一九六二年）

本書は、六年前に刊行した『日本文化と建築』の一種の改訂版にあたるものである。

『日本文化と建築』は、その時までに私が書いた伝統に関する論文のほとんどすべてを収録したため、分厚いものになり、値段も比較的高価なものになってしまった。それはそれなりに意味があったと思うのだが、いま読み返してみると、なくもがなと思われる文章がかなり混じっている。それに、今度は、若い人びとにも手に入りやすい廉価なものにしたいという出版社からの申し入れがあったが、旧著を読みやすい普通のかたちで廉価版にすると二冊分になってしまう。しかしその必要はあるまいと考えた。

そこで旧著から私がいささか愛着のようなものを感じている論文を半分ほど選びだし、それにごく最近になって書いたものを加えて、まったく新しく組みかえることにした。今度新たに入れたのは、「風」「竹」「桂と日光」の三篇である。字数からいえば、旧著の半分だが、この本と筑摩書房から一昨年出した『黒潮の流れの中で』を読んでいただけば、日本文化に対する私の考えのおおよそは、ご理解いただけたと思う。

一九七一年七月

川添 登

論文初出覚書

- 生きているカタチ……………『読売新聞』・一九六二年八月二日～二八日
- 風——予感の美学……………安田武・多田道太郎編・『日本の美学』・一九七〇年・風濤社
- 竹——東洋の美学……………『竹』・一九六九年・学芸書林
- 暮しの中の美……………『読売新聞』・一九六三年七月八日
- カタチ論……………『デザイン』・一九六三年二月号
- 伊勢神宮の造形——伝統論の出發と終結……………『文学』・一九五九年七月
- 薬師寺の東塔……………亀井勝一郎他共著・『薬師寺』・一九六三年・淡交新社
- 西芳寺の庭園……………『美術ジャーナル』・一九六一年九月号
- 桂と日光……………日本文化の歴史10・『閉ざされた社会』・一九七〇年・学習研究社
- 国民的秩序の形成……………『思想』・一九六一年一月号
- 国民文化の形成……………『思想』・一九六二年一月号
- 国民文化論の盲点……………『週刊読書人』・一九六三年一月一日号
- 国際交流と国民的伝統……………『思想』・一九六二年一月号